

生涯を通した知的障害者への読書支援

—だれもがみんな読書を楽しみたい、障害があっても願いはいっしょ

大和大学保健医療学部

教授 藤澤 和子

LLブック（やさしく読める本） セミナーの活動

私は、「知的障害・自閉症児者のための読書活動を進める会」の仲間とともに、2005年から、「LLブックセミナー」を毎年1月頃に、大阪市立中央図書館の協力を得て、主催しています。2017年で、第12回をむかえました。

セミナーの目的は、サブタイトルで表示している「だれもがみんな読書を楽しみたい。知的障害や自閉症、読み書き障害などがあっても、願いはいっしょ」です。子どもから成人、老人まで年齢を問わずに、障害のない人と同じように、読書の機会がもてることを願って始めた活動です。

セミナーの目的に賛同していただける講師の方のお話を聞いたり、知的障害者ご本人の意見を聞いて、読書支援の普及に努めています。「わいわい文庫活用術」に執筆されている野口武悟先生（専修大学）や山内薫さん（元墨田区立ひきふね図書館）にも、お話ししていただきました。

このセミナーをはじめたきっかけは、

特に青年期、成人期になった知的障害者が、読むことのできる生活年齢に合ったわかりやすい本がほとんどないという現実があるからでした。

スウェーデンでは、このような本をLLブック（Lättlästの略語）「やさしく読める本」と呼び、国の政策として現在までに約800冊を出版しています。例えば、恋愛のお話、ダンスの誘いやデートをする時のエチケットの本、人が死ぬことやお葬式のマナーの本など、幅広いジャンルでやさしく書かれた本が出版されています。子どもから成人まで、一生涯を通して、読書を楽しみ、情報を得る権利が保障される政策が進められています。

読むことの大切さ

私たちは、必ず毎日何かを読んでいます。新聞、小説やエッセイ、マンガなどを読んで、楽しみや情報を得ています。面白い小説やマンガ、興味のある雑誌や新聞記事を読んでいる時、私たちは、想像力を働かせ、知的な関心と興奮、満足を味わっています。

私たちは、読むことがあたりまえに感じて生活していますが、もし、そうではなくなったら、想像もつかないほどの不自由さと不安を感じ、充足感のない生活を送らなければならないでしょう。知的障害者も同じです。文字が読めない、読解力が弱いからといって、本や新しい情報に関心がないわけではありません。それは読書支援をされている先生や図書館の司書の方などであれば、ご存じのことだと思います。

ただ、自分で関心があることを自覚したり、要求したりすることは苦手な人が多いので、まわりに支援の必要が認識されにくいのです。知的障害者に、読書から得ることができる楽しみや情報を、私たちと平等に保障する読書支援はとても重要なことです。

読書支援の視点

知的障害者へ読書支援をするために必要なことは何でしょうか？ それは、次の3点だと思います。

- (1) 生活年齢に応じて興味がもてる本
- (2) 本を届けるためのアクセシブルなメディア
- (3) 届ける人の働きかけ

これらの3点がかみ合えば、子どもから成人まで生涯にわたって読書の楽しみを、彼らに届けることができます。

そして、とりわけ子どもの時の読書

支援は、その後の読書への興味に大きく影響すると考えられます。文部科学省が学齢期の読書活動を推進するだけでなく、0歳時の赤ちゃんのいる家庭に絵本をプレゼントして、絵本をきっかけに親子で楽しい時間を過ごしてもらおうというブックスタートが、行政等を通して行われています。成人した知的障害者の方に、本を読むことが好きかどうか、またどんな本が読みたいかについて調査した時に、読書が好きだと答えた人の多くが、ご家庭や学校で読み聞かせてもらった体験をもっておられました。障害のあるなしに関わらず、幼児期や学齢期の読書経験の影響は大きく、読書支援の重要性が高いと考えられます。

(1) 生活年齢に応じて興味がもてる本

幼児期から小学生のころは、絵本がとても良い本になります。絵が多く、文字が少なく、簡単なことばと、身近で子どもが好む素材が使われているからです。中学や高校になると、興味のあることが載っている本は、絵本ではなくなってきます。野球やサッカー、恋愛、芸能、旅行など、興味が広がってきます。

しかし、一般書は難しく理解できない人がほとんどです。彼らの生活年齢の興味に合わせた内容が、理解力に応じてわかりやすく書かれた本が必要

とされます。例えば、知的障害者の当事者団体である全国手をつなぐ育成会連合会の『自立生活ハンドブック』というシリーズ、LLブック研究グループの『わたしのかぞく：なにが起こるかな?』（樹村房）などのLLブックが、ニーズに応じるものとしてあげられます。他にも近畿視情協が作成したLLブックのリストに、入手できる本のタイトルが掲載されています。

URL : <http://www.lnetk.jp/ll-book.htm>

(2) 本を届けるためのアクセシブルなメディア

本は、紙ベースのものだけではなくありません。読めなくても聞いて見て触れて楽しむことも読書です。多感覚を利用して、本にアクセスできるメディアの代表として、マルチメディアDAISY図書があります。

スウェーデンでは、1960年代から2015年までLLブックの制作や普及を担ってきたLL協会がなくなり、MTM (MYNDIGHETEN FÖR TILLGÄNGLIGA MEDIERの省略) というメディアの利用を進める省庁が、業務を引き継ぎました。そして、紙ベースのLLブックから、マルチメディアDAISY等の電子媒体のアクセシブルな図書を制作する方向にあります。これは世界的な流れだと思います。

生活年齢に合った本の中には、読む

のは難しいが、聞いて見ると理解できる本もあります。私が特別支援学校に勤めていた時、2名の知的障害のある男子の中学生に、マルチメディアDAISY図書の『赤いハイヒールある愛のものがたり』（日本身体障害者リハビリテーション協会）を見せたことがあります。彼らは、興味をもって最後まで見聞きしました。そして、もう1回見たいと要求しました。

この本は、スウェーデンのLLブックの翻訳で、親から自立していく娘の成長を、男性との恋心に絡めて描いたものです。写真と文章から構成されていますが、文字が読めない人には、物語の展開が十分にはわかりません。マルチメディアDAISY図書で写真に合わせて音声が入るから、面白かったのだと思います。

中学生の彼らにとって、きれいな女性の恋のお話は、興味深いものだったのでしょう。重度重複の小学生の児童には、わいわい文庫の『ノタンシリーズ』、4、5歳の理解力がある中学生には『じごくのそうべい』『11びきのねこシリーズ』などが人気でした。わいわい文庫で、興味のある本にアクセスして楽しむことができました。また、数名の学級で一緒に楽しんだり、1人で読んだり、読書の仕方を選択できることも、アクセスの良さだと思います。わいわい文庫は、読書支援の大

きな役割を担っています。

(3) 届ける人の働きかけ

LLブックやマルチメディアDAISY図書が増えても、届ける人の働きがなないと、知的障害者には届きません。自分で積極的に本を選んで読書できる人は少ないです。

特に、子どもたちには、本を選ぶことや、楽しめる方法を教えていく必要があります。この本が好きかな、学級での読み聞かせをしようか、劇にして演じるのはどうか、マルチメディアDAISY図書を使おうかなどと、先生は、日々考えながら支援されていると思います。

子どもたちの興味を示す視線と笑顔が、支援の成功の指標となります。さ

まざまな本と、本の出会い方の豊かな経験が、青年期以降の読書への興味を育てていきます。

学校を卒業した後は、読書支援を受けられることができる機会や環境が少なくなります。知的障害者が利用しやすい公共図書館のサービスなどが求められています。わかりやすい資料のコーナーを作り、施設やデイセンターと連携して、彼らが図書館で、LLブックやマルチメディアDAISY図書を読むことができる機会を設けるなどの取り組みが必要です。学校の先生に代わり、公共図書館の司書、施設の職員、グループホームやデイセンターの職員の方々などが、読書支援を引き継いでいただくことを願っています。

